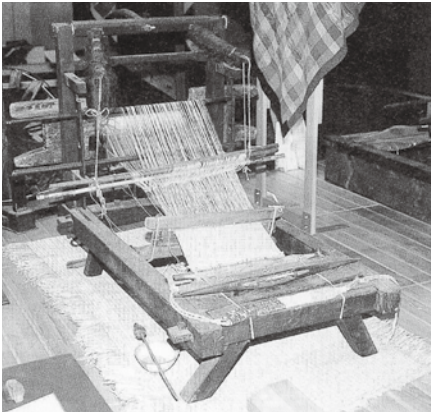


【問合せ】  
市史編さん室 ☎ 017-732-5271

## 裂織の仕事着「サグリ」

### 雪国に育まれた布文化

本県には「津軽こぎん刺し」「南部菱刺し」「つづれ刺し」「裂織さきおり」など、先人が育んできた雪国ならではの優れた布文化があります。先人たちは木綿の育たない寒冷地でいかに温かく、そして丈夫な労働着や生活着を作るか工夫し、改良を重ねてきました。その中で青森市内の久栗坂や後潟などでも使用された裂織の仕事着に焦点をあててみたいと思います。



写真① 地機

### 津軽の裂織

現在、裂織は「布の再利用」というキャッチフレーズで注目を集めています。裂織は古手木綿布ふるて（使いふるした木綿の布）を細く裂いてそれをよこ糸として織り込んだ布のことをいいます。今日、裂織と言えば南部地方の「南部裂織」を思い浮かべるかたが多いのではないかと思います。南部地方では終戦直後まで地機じまき（写真①）で麻布が織り続けられていました。昭和23年（1948）に麻の栽培が禁止され、麻織物は作られなくなりましたが、遺された地機を使い、裂織が近年まで織られていました。カラフルなコタツがけなどの裂織が多く残っている一方で、裂織といえば南部裂織となったようです。しかし、南部裂織が作られる以前に、津軽地方では、北前船によって南部地方より早く入ってきた木綿を使って裂織が作られており、津軽の海岸沿いの漁村では、昭和10年頃まで、裂織が織



写真② 使い込まれた久栗坂のサグリ

られていました。この津軽の裂織は「サグリ」と呼ばれ、生地が厚く、風や水に強く保温性に優れているため主に漁師の仕事着として使用されてきました。

裂織の仕事着は、日本海沿岸の丹後たんご地方や福井県、佐渡などで着用されたことが知られています。青森県内では津軽半島や下北半島の沿岸部で使われました。

青森市内では後潟で昭和20年頃まで仕事着として着られ、久栗坂には使い込まれたサグリが残されています（写真②）。また、青森市では県民俗文化財に指定されたサグリを64点所蔵しています。

では、津軽では、裂織がいつ頃から作られるようになったのか探ってみることにします。

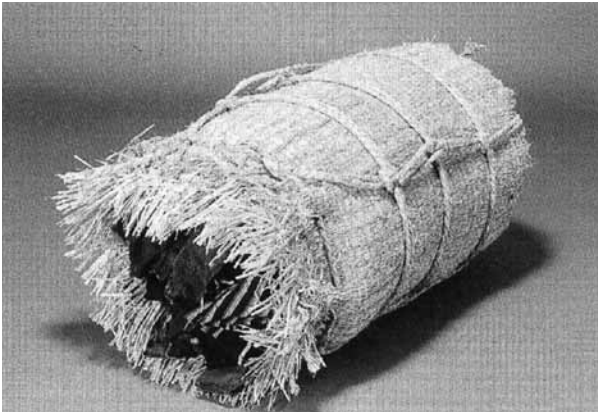
### 麻裂織から木綿裂織へ

藩政時代、十八世紀前半の弘前藩領では、日常の働着はたらきぎには麻の着用しか許可されませんでした。安永6年（1777）になると、原則は麻でも手織木綿は認められるようになりました。

一方、木綿は藩政時代中期には津軽にもたらされています。しかし、天明5年（1785）に菅江真澄が津軽で目にした庶民の衣服は、麻を主としたものでした。木綿はまだ一般の人々の衣類には使われていなかったことがわかります。

天明8年の『外ヶ浜づたい』で菅江真澄は東津軽郡平館村（外ヶ浜町）根岸で「麻芋あさおの糸をたてぬきにした厚織の裂織」を目にしています。一般に古手木綿布を細く裂いてそれをよこ糸として織り込むことから「裂織」というのだと考えられてきましたが、木綿以前にすでに麻の太糸などを織り込んだ厚手の布を織る裂織の技法があったようです。

寛政2年（1790）以降になると庶民の仕事着も麻布と木綿が認められるようになります。文政元年（1818）江戸の旅絵師による「旅日記」に油川六枚橋で「さきおりといふ―立（タテ）麻にして横（ヨコ）木綿なり―を着たり」とあります。この頃には、



写真③ 「サギ」の入った「タデ」

よこ糸に木綿布の裂いたものが使われていたことがわかります。  
このように江戸時代中期には麻の裂織が織られ、その後、庶民も木綿が手に入るようになり、木綿の裂織が作られるようになったようです。

### サグリの制作に使った木綿

サグリはたて糸には麻糸や木綿糸が使われ、よこ糸には古手木綿布が使われています。一般的な裂織のよこ糸の作り方は木綿布を手で裂く方法が取られますが、青森のサグリは布を和バサミで一分(3ミリメートル)程の幅に狭む方法が取られました。ハサミで、糸目にそって糸をとり出さなければなら



写真④ よこ糸に木綿布と糸を織り込んだサグリ

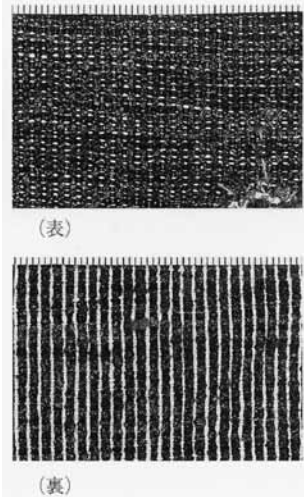
らないので、手に豆が出来るほど大変な作業でした。その木綿も現在目にするような反物ではなく、東北の農漁民が購入できる木綿は圧倒的に古物や伸継(使い古した衣類の使える箇所だけを取り取った小布)などでした。青森市内の農漁民の仕事着の多くは昭和20年代まで木綿の端切れを綴れ合わせ、細かく刺したものでした。  
サグリに使う木綿はさらにそれらとも別のものでした。呉服屋の店頭ではなく、裏口で販売され、「タデ」(写真③)という藁の入れ物に入った、よこ糸のついた木綿の切れ切れの「サギ」といわれる布でした。上方ではどうにも利用されなかった布片が、商品として東北に流通していたのです。サギの布は、濃淡があるものの紺色、藍色をしていました。そのサギを使って、木綿の色が縮にならないように、そして

濃紺の地が均一にみえるように織れば「織り上手」といわれました。

### 特徴的なサグリの織り方

サグリの織り方の特徴はよこ糸に木綿布ばかりでなく糸を交互に織り込んでいることです(写真④)。よこ糸に布だけを織り込むよりも織りが締まり固い布になります。よこ糸にする

布の色に気をつける以外に織り方にも工夫がこらされています。普通の平織は上糸、下糸とも同じ糸を使いますが、サグリの多くは上糸に藍色や黒色の染糸を使い、下糸には生成りの糸(白糸)が使われています。というのも生成りの糸は藍糸や黒糸よりも安かったのです。技を駆使して織ったサグリの表面は藍色一色ですが、裏面は、生成木綿糸の白色が一面に浮き出ています(写真⑤)。さらにたて糸の本数を減らし、経済的に安く仕上げているので



写真⑤ 拡大した織り目

す。当時の人々の涙ぐましい努力と津軽のサグリのすごさが一層わかります。麻の時代から自らの衣服は自分達が織って使っていました。これらのサグリは生活必需品として織られた最後の衣服でした。

### 布に託された想い

一枚の布さえも手に入れることができなかつた人々が半端布を使って、まるで反物から着物を作ったように見事な布に織り上げているのがサグリです。厳しい環境の中で織ったサグリは「末代もの」と言われていたそうです。サグリを代々引き継いで着ることによって、作ってくれた人への想いはもちろん、前の代に着た人のことをも思い、大切にすることが、ひとを大切にすることに繋がります。

サグリには木綿へのいたわりの心があり、木綿を知った人達の手わざが生きています。厳しい北国の風土の中で、衣を自ら作り、大事にした人々は、いたわりとやさしさをもっています。その心優しさと逞しさ、最後までやりぬく忍耐強さは現代の青森の人々にも受け継がれていると思います。(市史編さん室嘱託員 三上洋子)